

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00101

研究課題名(和文) 寛容と不寛容に関する議論形態の分析－啓蒙期の哲学者メンデルスゾーンの事例を中心に

研究課題名(英文) Analysis of argument forms about tolerance and intolerance : On the case of the Enlightenment philosopher Mendelssohn

研究代表者

後藤 正英 (GOTO, MASAHIDE)

佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：60447985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：宗教的寛容論は、近代のユダヤ人がヨーロッパ世界へ参入していく際に重要な役割を果たした思想である。本研究では、18世紀ドイツで活躍したユダヤ人の哲学者モーゼス・メンデルスゾーンを具体例として、当時の複雑な社会状況の中で、「寛容」と「不寛容」をめぐって、どのような議論が行なわれたのかを分析した。特に、メンデルスゾーンが、外側のキリスト教社会からの不寛容に対して、どのような対抗言説を展開していたのかを明らかにした。彼は、寛容という当時の流行語がマジョリティ側の同化主義に基づいていることを敏感に察知していた。これは、現代の政治哲学者フォアストの用語では、寛容の許可構想として性格づけられるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会の分断が深刻化する近年の状況において、寛容な社会の実現は喫緊の課題である。モーゼス・メンデルスゾーンは、理性の普遍性と宗教文化の多様性の両立を目指し、ユダヤ人への差別に対抗して哲学を遂行する中で、人間の真の尊厳に対する思索を深めた人物であった。私の研究は、彼の先進的な思想の現代的意義を明らかにするものである。今回、パンデミックにより海外の学会での対面発表が中止になったことから、海外渡航のための予算を使用して、研究成果を一冊の単著として刊行した。この分野に関する情報を一般読者も読める形で提供したことは、社会的意義が大きいといえる。

研究成果の概要(英文)：Religious tolerance is an idea that played an important role in the entering of modern Jewish people into the European world. In this study, I analyzed the debate over "tolerance" and "intolerance" in the complex social context of the time, taking Moses Mendelssohn, a famous Jewish philosopher in 18th century Germany, as a specific example. I clarified how Mendelssohn developed a counter-discourse to the intolerance of the outer Christian society. He was sensitive to the fact that the popular term "tolerance" at the time was based on assimilationism on the part of the majority. This is what can be characterized as a permission conception of tolerance (terminology by Rainer Forst).

研究分野：思想史

キーワード：メンデルスゾーン カント 寛容 進歩 啓蒙 フォアスト 民族宗教 ユダヤ教

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで、過去の幾つかの科研費を通して、18世紀後半のベルリンで活躍したユダヤ人の哲学者モーゼス・メンデルスゾーンの啓蒙思想がもつポテンシャルを明らかにする研究を展開してきた。特に前回の科研費(モデレート啓蒙主義の再考—メンデルスゾーンにおける啓蒙と宗教の両立可能性、基盤研究C、17K02258)で、メンデルスゾーンの代表的研究者であるシュムエル・ファイナー氏とミヒャ・ゴットリーブ氏を招聘し、彼らとの研究交流を通して次の2点を明確化することができた。1)メンデルスゾーンの啓蒙思想については、急進的啓蒙主義(ジョン・イスラエル)との対比において、穏健的で調整的な性格をもつものとして理解されることが多かった。しかし、彼の活動の原点にあるのは理不尽な差別や抑圧への怒りであり、彼の啓蒙主義者としての立場を闘争的性格において捉えることが必要である。この点を指摘したのはファイナー氏である。2)かつて政治学者の水島治郎氏は、啓蒙主義的かつリベラルな価値観を共有していないという主張に基づいてムスリム移民を排除しようとする西ヨーロッパの政治勢力を「啓蒙主義的排外主義」と名付けた。私は、この議論が18世紀のユダヤ人のメンデルスゾーンが直面していた問題と同型であることを指摘した。メンデルスゾーンは、ユダヤ教と啓蒙思想の両立を疑う人々の不寛容的言説に対抗したのであり、ゴットリーブ氏は、「啓蒙主義的排外主義」に対抗するメンデルスゾーンの戦略が多面的であることを、以下の5点に即して分析した。1.ユダヤ人への不寛容は人権の普遍性に背反する。2.国教制度は不寛容である。3.ユダヤ人を受容することはドイツ社会の発展に寄与しうる。4.ユダヤ教の内部改革も必要である。5.ドイツ国家へのユダヤ人の帰属性をコスモポリタンの理解する必要がある。6.市民権獲得の代償としてユダヤ人が宗教や民族の特性を放棄することを要求されるなら、それを拒否すべきある。こうしたゴットリーブ氏の詳細な分析により、メンデルスゾーンの思想を、現代にも通じるマイノリティ側からの共生のための提言として捉えることが可能となった。以上の観点を念頭に置きつつ、本研究では当時の宗教論的寛容論を分析することを試みた。

さらに、私は、今回の科研費の研究開始の数年前から、現代の寛容論を牽引する存在であるライナー・フォアストの仕事に注目してきた。彼の議論を参照することで、現代的な観点からメンデルスゾーンの寛容論を構造化し、寛容思想史の中での啓蒙期の寛容論の位置づけを明確にすることが可能となる。このような見通しをもって研究を開始することになった。

2. 研究の目的

21世紀に入り、不寛容や排外主義を示す事件が多発する中で、一時期は過去の言葉となった「寛容」に注目が集まるようになった。寛容論は、古代にまで遡る議論であるが、現代的な意味での寛容論の出発点は17-18世紀のヨーロッパにある。当初、寛容論は、キリスト教内部の宗派間の相互寛容が中心的なテーマだったが、次第に、キリスト教以外の宗教、特に近代ヨーロッパにおける最大のマイノリティ宗教であったユダヤ教徒への寛容も意識されるようになった。18世紀ドイツの啓蒙主義を代表する存在であったモーゼス・メンデルスゾーンは、ドイツ社会の宗教的少数派の当事者として寛容の問題に取り組むことになった。

本研究の目的は、メンデルスゾーンが、外部のドイツ社会と内部のユダヤ共同体の間で、不寛容と闘うためにどのような言説を展開したのかを分析すること点にある。その際に、18世紀ドイツの寛容論を構造化するためのツールとして、現代政治哲学における寛容論(特にライナー・

フォアスト)を参照する。

3. 研究の方法

研究方法としては、当初は、国内外の学会への参加・発表と論文掲載を中心として研究成果を発表する予定であった。しかし、研究開始直後に、パンデミックが発生したため、学会への参加・発表については、当初の予定を大幅に変更せざるを得なくなった。学会への対面参加が難しくなった反面、オンラインを通じて学会に参加することが可能となった。特に本研究期間の前半には、多数のオンライン学会への参加を通して、研究を進捗させることができた。

また、パンデミックにより海外渡航が制限されたため、渡航費として想定していた予算に余裕が発生した。そのため、個々の論文発表にとどまらず、これまでの研究成果を集約する形で単著を刊行することにした。パンデミックによる研究の停滞を調整するために、研究期間を1年間延長することにした。

4. 研究成果

1年目の成果

9月の日本宗教学会において、「近代ドイツにおけるユダヤ教の再定義とその比較宗教学意義」と題する研究発表を行なった。近代のユダヤ教は、キリスト教をスタンダードとする宗教概念に対抗し、宗教における独断論や権威主義を批判し、ユダヤ教にはそれが当てはまらないことを主張しようとした。キリスト教との対抗関係において形成された近代ユダヤ教の自己理解は、マジヨリティ側の国家権力に対抗している点では、「異議申し立てとしての宗教」(ヴィシュワナータン)を形成しているといえる。

12月の西日本哲学会では「魂の不死をめぐる系譜 古代哲学と近代哲学のダイアログ」と題するシンポジウムを企画し、納富信留氏と共に登壇した。私は「啓蒙思想は魂の不死をめぐって何を問題としたのか」という題目で研究発表を行なった。

この論文では、ひたすらに来世を待ち望むのではなく現世志向が強まった18世紀において、なぜ「魂の不死」が盛んに論じられたのか、という点を解明するべく、当時、ヨーロッパ中で大ベストセラーとなったメンデルスゾーンの『フェードン』に注目した。メンデルスゾーンは、ライプニッツの『モナドロジー』で主張された前成説を根拠として、道徳的な完全性を求める過程で前世と来世が接続する方向性を示した。こうした考え方については、啓蒙思想における魂の不死とは現世の延長のことに他ならず、来世を現世化した世俗的時間の典型であるという評価が行なわれるかもしれない。しかし、私は、道徳的努力の無限の過程は、線の延長として表象されるものではなくて、その都度の道徳的行為において永遠との接点が発生するような、独自の時間概念なのではないか、と解釈している。本発表では、従来、思想の違いの方が強調されるカントとメンデルスゾーンの間、魂の不死をめぐる実践的理解をめぐって問題関心の共通性が見出されることを指摘した。さらに、論文の中では、プラトンの『パイドン』を翻案する形で執筆された『フェードン』という著作において、文化間(ユダヤ思想、古代ギリシア思想、ヘブライ思想)の創造的邂逅が行なわれていることにも言及した。

2年目の成果

加藤泰史氏の編集による論集『スピノザと近代ドイツ：思想史の虚軸』(岩波書店、2022年)に「スピノザとメンデルスゾーン 汎神論論争が抱える「神学・政治問題」」という論考を寄稿した。レオ・シュトラウスの問題提起に即して、汎神論論争は、形而上学の論争だけでなく、

宗教的・政治的論争の性格も有していたことを指摘した。この論考を執筆する中で次の洞察を得ることができた。メンデルスゾーンにとって、理性こそは異なる意見をもつ人々が共通理解を深めるための場所であった。しかし、汎神論論争では、当の理性概念自体が対立を生みだす対象になっていた。ヤコービは、メンデルスゾーンを含むベルリンの啓蒙主義者たちが、理性と自分たちの立場を一体化しており、理性の名のもとに自分と異なる見解の人々に対して不寛容に振る舞っている点を厳しく批判したのである。それに対して、メンデルスゾーンは、ヤコービのことを、信仰の名のもとに理性の口を封じる非合理的な思想家であると非難した。双方とも、それぞれの仕方で哲学的言論の自由を追求したが、理性概念の違いや文化的コンテキストの違いが意見の対立を産み出すことになった。「汎神論論争は、歴史や文化を思索の糧としつつ同時にそれらを超越する真理を探究する格闘の記録であり、哲学的言説をめぐる公共圏の形成過程を教えてくれるドキュメントであると言えるだろう。」(後藤正英『格闘する啓蒙哲学者の軌跡』、晃洋書房、2024年、106頁)。

3年目の成果

『カント研究 24号』のために、ポール・ガイヤーがメンデルスゾーンとカントを比較研究した書籍 (Paul Guyer, *Reason and Experience in Mendelssohn and Kant*, Oxford University Press, 2020) の書評を執筆した。ガイヤーは、宗教の多様性について、カントよりもメンデルスゾーンの方が深い理解をもっていたことを指摘している。ここで問題となってくるのは人類の進歩に関する議論である。メンデルスゾーンは、個々人の発展には様々なリズムとスケールがある以上、一律な形での進歩論は展開できないことを主張した。メンデルスゾーンにおいて、個人の学習の多様性と宗教の多様性は密接に結びついている。宗教にはそれぞれ固有の発展のリズムがあり、諸宗教の間で進歩に関して優劣を語ることはできないのである。メンデルスゾーンにとって、このような主張は、キリスト教に対してユダヤ教を劣位に位置づける発想への対抗言説を形成している。

4年目の成果

5月に、エヴァ・ブッデベルク氏とライナー・フォアスト氏の招聘を受けて、フランクフルト大学の研究期間で開催された日独国際会議「批判理論と文化の差異 日独の対話」に参加し、ドイツ語による研究発表を行なった。日独から総勢14名の研究者が参加し、フランクフルト学派の批判理論の観点から様々な社会問題について共同討議を行なった。私の研究発表では、ドイツにおける政教分離訴訟を論じたライナー・フォアストの論文 (Rainer Forst, "Ein Gericht und viele Kulturen. Rechtsprechung im Konflikt" in ders., *Normativität und Macht*, Frankfurt/M. 2015.) や彼の寛容に関する許可構想を念頭において、戦後日本の政教分離訴訟を分析した。日独双方の事例において、少数派から信教の自由に関する訴訟が行なわれた場合、多数派の側は自らの行為は一宗教ではなく習俗や文化であると反論する傾向が見られた。ここで重要な点は、世俗社会においては、多数派の宗教は、宗教団体の形を取っていなくても、当該社会の文化や習俗となって溶け込んでいるので、曖昧な形で存在する多数派の文化が少数派に対して抑圧的に機能する可能性があるということである。

2025年3月には、これまでの研究成果をまとめる形で、晃洋書房より単著『不寛容と格闘する啓蒙哲学者の軌跡 モーゼス・メンデルスゾーンの思想と現代性』を刊行した。単著を刊行するにあたって、過去の論考をそのままに収録するのではなく、幾つかの新しい知見を盛り込むことができた。その中の一つを紹介しよう。

フォアストによれば、メンデルスゾーンは、ユダヤ教への同化主義的寛容が、ユダヤ教徒に自らの宗教文化を捨てることを要求する結果になることを鋭く見抜いていた。メンデルスゾーンは、理性の統一宗教を形成することを批判し、個々の宗教の違いを残すべきことを強調した。そ

のうえで、フォアストは、メンデルスゾーンについては、諸宗教の違いを重視しながらも、それらの多様性を多様性として把握するための理論をもっていなかったと述べている。理性の有限性への理解が不十分であるために、理性の普遍主義が、理性をもたないと見なされる人々に対して排他的に機能する懸念がまだ残っている、と指摘するのである。

しかし、私は、フォアストとは異なる解釈も可能であると考え。ユダヤ思想史家のフロイデントールも指摘するように、メンデルスゾーンは、宗教は理性だけで構成されているわけではなく、象徴的儀礼とそれに基づく共同体が、それぞれの宗教の独自性を構成していることを十分に認識していたからである。

18 世紀啓蒙期の寛容研究の応用可能性

本研究では、近代ヨーロッパにおいてマイノリティ宗教の位置を確保しようとしたメンデルスゾーンの寛容論を別の領域へと応用・発展させていく研究にも着手した。第一のテーマはユダヤ教におけるフェミニズム神学であり、第二のテーマは現代ヨーロッパのマイノリティ宗教である。第一のテーマについては、2020 年に開催した小規模なオンライン研究会と 2023 年の日本ユダヤ学会関西例会において研究成果を発表した。特に現代アメリカの著名なフェミニズム神学者であるプラスコウとアドラーに焦点をあてて考察を行なった。18 世紀のメンデルスゾーンは、ユダヤ教という宗教に帰属し続けながら、共同体の内部に向けて教育や埋葬に関する改革を提言していた。現代アメリカのユダヤ教のフェミニスト神学者たちも、ユダヤ教の内部にとどまりつつ、伝統のポテンシャルを発掘する形で、ユダヤ教の中に女性の場所を確保しようとした。

第二のテーマでは、現代ヨーロッパにおいて土着の古代民族宗教を復興させようとしている団体が、国家と間で、どのような交渉を行なっているのかを考察した。メンデルスゾーンも、当時において、国家の中でのユダヤの宗教共同体の位置づけに苦慮していた。キリスト教がマジョリティを占める現代ヨーロッパにおいて、古代の民族宗教を復興させようとする団体は、マイノリティの宗教として位置づけられている。彼らは、国家による宗教団体としての認定の水準を引き上げようとする際に、民主的な国家の法に適合する形で様々なアプローチを試みている。特に私が注目しているのは、リトアニアのロムヴァやラトビアのディエヴトゥリーヴァである。

このテーマについては、この分野の代表的研究者であるマイケル・ストルミスカ氏の論考を翻訳し、2023 年にはヨーロッパ民族宗教会議（ECER）に参加することで研究を進捗させた。

最後にまとめると、4 年間の研究を通して見えてきた今後の研究課題は、寛容と進歩思想の関係である。自分とは異なる文化をもつ人々と、進歩史観に基づく優劣の観点から価値付けすることなく共生していくための思想的展望を提供する必要がある。今後も、18 世紀の啓蒙思想と現代の寛容思想の研究を通して、この問題を追及していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 後藤正英 マイケル・ストルミスカ	4. 巻 7
2. 論文標題 東欧における東洋の宗教：リトアニアからの三つの事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 39-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/00023397	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 後藤正英	4. 巻 27
2. 論文標題 合評会 下田和宣著『宗教史の哲学 ー後期ヘーゲルの迂回路』 評論1	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ヘーゲル哲学研究』	6. 最初と最後の頁 13-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 後藤正英	4. 巻 29
2. 論文標題 啓蒙思想は魂の不死をめぐる何の問題としたのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 後藤正英	4. 巻 38
2. 論文標題 書評「堀江宗正著『ポップ・スピリチュアリティ メディア化された宗教性』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 124-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Masahide GOTO
2. 発表標題 Die ethisch-kulturell pluralistische Gesellschaft und die Trennung von Staat und Religion - Deutschland und Japan im Vergleich
3. 学会等名 Kritische Theorie und Kulturelle Differenz : Ein deutsch-japanischer Dialog
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 ユダヤのフェミニズム思想 ーその神学的潮流
3. 学会等名 日本ユダヤ学会 関西例会
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 石黒安里
2. 発表標題 現代アメリカにおけるユダヤ教の境界線 女性ラビをめぐる
3. 学会等名 科研費研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北美幸
2. 発表標題 公民権運動に参加したユダヤ人女性たち
3. 学会等名 科研費研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 近現代ユダヤ思想におけるジェンダー論
3. 学会等名 科研費研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 「近代ドイツにおけるユダヤ教の再定義とその比較宗教学的意義」
3. 学会等名 日本宗教学会・第79回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 「啓蒙思想は魂の不死をめぐる何の問題としたのか」
3. 学会等名 西日本哲学会・第71回大会・シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 後藤正英
2. 発表標題 「下田氏への論評 ヤコービ解釈と宗教学の観点から」
3. 学会等名 日本ヘーゲル学会・第31回研究大会・合評会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 後藤正英	4. 発行年 2024年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 不寛容と格闘する啓蒙哲学者の軌跡 モーゼス・メンデルスゾーンの思想と現代性	

1. 著者名 伊原木大祐 / 竹内綱史 / 古荘匡義編 後藤正英・第2部第7章「神話の問題」	4. 発行年 2023年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 282
3. 書名 『宗教学』	

1. 著者名 加藤泰史編 後藤正英・第2部6「スピノザとメンデルスゾーン」	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 402
3. 書名 『スピノザと近代ドイツ 思想史の虚軸』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p> http://www.mendelssohn-dessau.de/ フランクフルト大学 規範的秩序・研究所 https://www.normativeorders.net/en/ 岩波書店 『スピノザと近代ドイツ 思想史の虚軸』 https://www.iwanami.co.jp/book/b600973.html 日本宗教学会 http://jpars.org/ 日本ヘーゲル学会 http://hegel.jp/ 西日本哲学会 https://sites.google.com/site/phawjp/ </p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ニューヨーク州立大学機構 オレンジ・カウンティ・コミュニティ・カレッジ			
イスラエル	バルイラン大学			
ドイツ	フランクフルト大学			